

龍門文庫蔵『公事根源抄』江戸初期写本 翻刻 卷上(一)

広島大学 日本語史研究会

一、龍門文庫蔵『公事根源抄』について

ここに翻刻する『公事根源抄』は、奈良吉野の阪本龍門文庫に蔵される、江戸時代初期の写本である。ただし、武井和人『中世古典籍学序説』(二〇〇九年、和泉書院) 141頁は、「室町末期写」とする。

『公事根源抄』は、一条兼良(二四〇二―一四八一)最初の著作と言われ、多数の写刊本が現存する。元禄七年(一六九四)には、注釈書である松下見林『公事根源集釈』が刊行されている。

他の写刊本・注釈書・翻刻等については、『日本古典文学大辞典』(一九八三年、岩波書店)や、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベースほか、右の武井著書を御参照願いたい。

龍門文庫蔵本は、現存諸本中、比較的古い写本である。龍門文庫本の書誌等は、川瀬一馬編著『龍門文庫善本書目』(一九八二年、阪本龍門文庫)とインターネット上の阪本龍門文庫善本電子画像集の解説に詳しい。本資料は、この電子画像集・古写本の部に全文公開されている。その公開画像から、ほとんどの漢字に振り仮名が振られ、濁点も加点されており、日本語史的な価値が高いことが知られる。そこで、広島大学日本語史研究会は、インターネット上のカラー写真に基づき、本書の輪読を進めてきた。本翻刻範囲輪読時の会員は、佐々木勇・本間啓朗・大場和香菜・岡村和奈・榎本由貴・土肥新一郎・早田奈美・

宮崎若菜・片平帆紀・難波周子・山口倫香である。

しかし、公開されている画像では、振り仮名や濁点に判然としない点が残る。また、公開画像では見えない綴じ目の文字も少なくない。そこで、原本閲覧を願ひ出、研究会会員が分担して、数度に亘って不明点を原本で確認した。原本閲覧調査には、佐々木勇・本間啓朗・土肥新一郎・山口倫香があたった。幸い、龍門文庫から翻刻の許可も頂けたため、龍門文庫蔵本の翻刻文を学界の研究進展のため、数回に分けて、公にする次第である。今回は、巻上前半の翻刻を公表する。

(以上、佐々木勇)

〈凡例〉

一、本翻刻は、龍門文庫『公事根源抄』(龍門文庫二〇八)原本に基づき、その全体を、現行の字体に改めたものである。仮名遣いは、原本のままとした。

一、本資料の振り仮名は、「つ」と「ツ」(舌内入声音と促音)とを、原則として使い分けている。そのため、翻刻でも、両者を区別した。一、本資料の濁点は、「・」と「…」とがある。何らかの使い分けがある可能性は存するものの、翻刻ではこの両者を区別していない。

一、虫損等のために文字が欠けている箇所は「」で括り推読であることを示し、翻刻上の注も、当該箇所「」に入れて記した。

一、翻刻にあたり、原本丁数表(オ)裏(ウ)ごとに行数を付した。  
一、本翻刻は、本間啓朗・土肥新一郎・宮崎若菜・山口倫香で作成し、  
佐々木勇が確認・修正した。

一、原本閲覧ならびに翻刻の御許可を賜わった公益財団法人 阪本龍  
門文庫に対し、心中より御礼申しあげる。

## 二、翻刻

(上 一オ)

1 公事根元抄

2 正月

3 四方拜 一日

4 元正の寅のときに天皇属星をとなへ身つから

5 天地四方山陵を拜し給て年災をもはらひ

6 寶祚をものり申さる、儀にて侍るにや清

7 涼殿の東階の前砌の外に御屏風をたてめ

8 くらしその中に御座三所をまうけそのまへにしら

9 木の机を置いて香華燈などをそなへ此所にして

10 御拜のぎしきありむかしは殿上の侍臣なども

11 四方拜をばしけるにや近比は内裏仙洞攝関大臣家な

(上 一ウ)

1 とのほかはさることもなき也この事いつ初

2 まるとも見えず仁和五年正月とらのこくに

3 天地四方属星山陵をおがみ給ふよし宇多天

4 皇の御記にのせ給たれとも濫觴とは見えず

5 又皇極天皇の御ときにあめをいのり給ふとて

6 南瀬河上に行幸ありて四方を跪拜し給  
7 ければ雨五日までふりけるよし日本紀に  
8 のせたれは是などをやはしめとも申へからん  
9 其うへ属星を拜してさいなんをのそくおもむきは  
10 天地瑞祥志といふ書に見えたり  
11 供二御薬 一 同日

(上 二オ)

1 元三の儀なり御殿にておこなはる主上晝御

2 座に出御なりて生氣の方の御衣を尋常

3 の御直衣のうへにかさねて奉る配膳の典侍

4 薬頭も生氣の色を着すこのとき先御厨

5 子所の御菌固を供す命婦藏人役送す

6 典侍次第に御前にす御はがためまいり

7 はて、薬子とて小女のいまだ嫁せざるをもと

8 めて是をもちゆることあり屠蘇は小兒よ

9 りのむといふほんもんあればそのため小兒

10 をえらんで今日まづのましむへしこの薬子

11 鬼問よりす、みて櫛の木丁のもとにさふらふ

(上 二ウ)

1 女官典薬をめして御くすりをもよをす一

2 献に先屠蘇を酒に入れて薬子にのましむ次

3 に銀器にいれて典薬とりて配膳につたふ

4 主上座をた、せ給て夜御殿のみなみの戸よ

5 り入給て御塗籠のひんがしの方の戸にむかふ

6 てた、せ給へは配膳御さかづきをもちて参ら

7 すこれも屠蘇は東戸にむきてのむ、かし  
 8 ほんもん有ゆへにや次に女官に返し給へ  
 9 はこれを後取の人にのましむ一日は四位二日は五  
 十日は六位蔵人も  
 10 むかしは上戸をえらんで後取にめしけるとか  
 11 や晦日の日奉行の蔵人交名をきり昏に  
 (上 三オ)  
 1 かきて殿上のすみのはしらにをす也さて  
 2 二こんには神明白散を供すむかしは肴を  
 3 後取の人に給ふことあり大根をたまふ女蔵  
 4 人給てあふぎにすへてこれをいだす元日は  
 5 人々しやうじんのゆへ「な」といへり江次第に  
 6 見えたり三こんに度障散を供すかくのこ  
 7 とく御くすりのぎしき三ヶ日あり第三日  
 8 には御湯薬をたてまつる銀器に入たり無  
 9 名指につけて御額ならびに御耳のうらにつ  
 10 けらる右の第四の指をかゝめてつくる也こ  
 11 れは薬師の印相にて侍るとかやこの薬の  
 (上 三ウ)  
 1 ぎしきは弘仁年中にはじめらる一人  
 2 これをのめは一家にやまひなし一家にこれを  
 3 のみぬれは一里に病なしといふめでたき  
 4 功能侍れはとしのはじめに是を奉るにや  
 5 供ニ御節供一 同日  
 6 是も三ヶ日の事なり寛平二年二  
 7 月の比後院の別當善といふ人におほ  
 8 せられて

9 毎節に  
 10 てうしん  
 11 せらる  
 (上 四オ)  
 1 諸院宮の  
 2 御節供も  
 3 これ  
 4 におなじ  
 5 異なる  
 6 ことは  
 7 侍らす  
 (上 五ウ)  
 1 朝賀 同日  
 2 是をば朝拜とも申なり辰のときに主上大  
 3 極殿に行幸ありておこなはせ給ふなり  
 4 群臣こと／＼く礼服を着してきながら御  
 5 即位のぎしきに同じ内辨などもあり開  
 6 門などありてめしの鼓をうたしむれば群  
 7 臣列して門に入天子高御座につかせ給へは  
 8 兵庫頭鉦をうつ執醫いで、帳を八字に  
 9 かゝく近仗警蹕を稱じ圖書 主殿香を  
 10 たく典侍再拜をととなふ群臣このとき再  
 11 拜す奏賀奏瑞とて二人の者庭にすゝみ  
 (上 六オ)  
 1 て祝し申事あり是は去年のめでたき  
 2 嘉瑞どものあるを國々より申せはそれを

3 して今日これを奏する也その時郡臣  
 4 再拜す次に舞踏すれば武官万歳の旗を  
 5 ふる也いとめてたきぎしきとも也神武  
 6 天皇元年正月一日橿原の宮に都をたて、  
 7 はしめて位につかせ給けるととき宇摩志摩  
 8 治命天瑞をそうせるよし日本紀にみえた  
 9 り孝徳天皇大化二年正月一日帝拜の事  
 10 侍るよし同書にのせたり是をまことの朝拜  
 11 とは申べからんしかるに一条院正暦よりのち  
 (上 六ウ)  
 1 は有とも承らすまた記録にも所見なきに  
 2 やいにしへは大極殿もありしかは也今は小  
 3 朝拜はかりになりにけり  
 4 小朝拜 同日  
 5 この事はたゞ臣下として元日にてあれは  
 6 天子を拜し奉るへきよしを申うけておこな  
 7 へる公事にて侍ればさして朝廷のためにも  
 8 侍らず神事佛事にもあらずされは是は  
 9 わたくしの礼なり君子に私なしといふ文  
 10 ありよろしからざること、延喜の御宇  
 11 に勅ありて延喜五年より左大臣時平公  
 (上 七オ)  
 1 におほせてとゞめさせ給し也抑朝拜は  
 2 百官ことごとく拜すといへとも小朝拜はたゞ  
 3 殿上ばかりなり百官ひとしからざるゆへに  
 4 わたくし有にたりとてとゞめさせ給しに

5 や然るに臣下ども元正の日君を拜し奉  
 6 ることをしきりに申うけしかは同十九年又  
 7 もとのごとくおこなはれ侍し也そのゆへは  
 8 延喜五年に臣下の拜をばとめさせ給しかと  
 9 も當代の親王達は猶拜礼のぎしきあり  
 10 それ臣子の道はあひかはるべからすいかでか  
 11 臣下のみをばとゞめらるべきとてかたく申  
 (上 七ウ)  
 1 うけよし貞信公御記にのせられたり  
 2 関白大臣以下天皇をおがみ奉るぎにて侍り  
 3 清涼殿の東庭に四位五位六位にいたる  
 4 まて袖をつらねて舞踏するなるべし  
 5 上よりしておほせらるゝ事にてなけれ  
 6 は下として  
 7 人々祇候のよしを先  
 8 無名門のまへ  
 9 弓場殿にたちつらなりて  
 10 上首の人  
 11 蔵人頭をもて  
 (上 八オ)  
 1 そうもんすその、ち  
 2 みかど出御なりて  
 3 小朝拜のぎしき侍るなり  
 4 朝拜を略するによりて  
 5 小朝拜とは申にや  
 6 されば  
 7 朝賀あるとしは

8 おこなはれざる  
9 なんかし

(上 八ウ・九オ、図絵)  
(上 九ウ)

1 元日節會 同日

2 そのぎ小朝拜はてぬれば内辨大臣陣座

3 につきて事をおこなふもし一上にあらずして

4 位次の大臣ならば内辨にさふらふべきよしを

5 識事をもておほせらるゝ也大かたよろづの

6 公事を一上たる人は前をわたすましきによ

7 陣のはしの座にて藏人をまねきて外任奏を

8 そうす筥のふたに入たり藏人内侍につきて

9 そうもんす是を御らんして返し給また諸

10 司奏は内侍所につぐへきよしをそうすいにしへは

11 庭にすゝみてそうしけるとかや諸司奏とは七

(上 一〇ウ)

1 曜御曆氷様腹赤御贄などの事也七ようの

2 御曆は中務省よりたてまつる日月火水木

3 金土の七曜をしるしたるよのつねのこよみ也

4 氷様は宮内省より奉る也去年のこほりを

5 おさめをきたる所々の様を今日節會のつみで

6 にそうもんする也あつさうつさいかほどの寸法

7 に侍るなどこまかにそうす氷様とて近代は石

8 瓦のわれを奉る也延喜式にも氷池風神祭

9 など侍り氷のおほくあるは聖代のしるし氷の

10 むぬは凶年にて侍ればこほりの御いのりとて大

11 ほうひほうをおこなはれけるとかや今日もよく

(上 一〇ウ)

1 こほりてめでたきよしのためしをそうする也

2 むかし仁徳天皇の御宇六十二年五月に額田大

3 中彦皇子鬪鶏野といふ所にかりしに出給

4 しどきに山上より野中をのぞみ見やり給しか

5 は庵をつくりたるやうなる所あり人をつかはし

6 て見せ給ふに窟なりと申すそのとき稲量

7 大山主といふ人かの野のあたりに侍しをめ

8 して野中にあるは何の窟ぞととはせ給へは

9 氷室なりと申す皇子のたまはくそのこほりを

10 はいかやうにしておさめたるそ又なに、かもちゆ

11 るそと、はせ給へはこたへて云土を一丈あまり

(上 一〇ウ)

1 ほりて草をその上にふきて茅萱などをあつく

2 とりしきて氷をおさめたるに夏月をへてもと

3 けずこれをとりにて熱月に酒をひたしてもちゆ

4 となんそのとき皇子このこほりを仁徳聖帝に

5 奉り給ければ斜ならず糸いかんあるよし日

6 本紀などにものせたりこれ氷をたてまつるは

7 じまり也其のちより季冬ごとにこれをおさめて

8 國々所々に氷室ををかれ侍し也又腹赤御

9 贄とは魚をつくしよりたてまつるなりむか

10 しはやかて節會などに供じけるにやはらかの

11 くいやうとてくいさしたるをみなとりわたして

1 食なり景行天皇の御ときつくしひごの國う  
 2 どのこほり長濱にて海人これをつりて奉る  
 3 その、ち聖武天皇の御とき天平十五年正月  
 4 十四日太宰府よりこれをたてまつりけりそ  
 5 れよりして毎年の節会に供すへきよしさ  
 6 だめをかる腹赤とは鱒といふ魚の事也此三  
 7 色をそうするを諸司奏とは申なるへし刻  
 8 限にのぞみて御門南殿に渡御なりて御帳の  
 9 内につかせ給ふ内辨陣座をたて陳マの後よ  
 10 り靴をはくこれよりさきに諸卿外辨につく  
 11 長樂門のひんがしのわき也是は大内にての  
 (上) 事也いまの世にはびんぎの所に幄屋をかまへ  
 1 てつく也内辨宜陽殿の兀子につくその、ち  
 2 謝座のぎありて階をのぼりて堂上の兀子に  
 3 つくこの間のさほう進退そ内辨の大事に  
 4 て家々の口傳故實など侍る事なめり囲門  
 5 をおほせて舍人二音めす大舍人四人唯稱す  
 6 少納言につけしめせは少納言諸卿をめす次第  
 7 に外辨の上首よりす、みて承明門をいりて  
 8 南庭に列立す親王の後には大臣その後に大納  
 9 言その後三位中納言その後四位宰相た  
 10 つ二位中納言は大納言のす系におめる三位宰相  
 11 (上) は中納言の末におめる異位重行に立定りての  
 (一二ウ)

2 ち内辨敷尹をおほす敷尹は敷居也堂上に  
 3 敷たる座に居よといふ心成へし群臣謝座  
 4 謝酒昇殿着座す内辨御膳をもよをす下  
 5 殿してこれをおほす内膳これを供すその、ちや  
 6 がてわきの御膳を供す大底御膳のくさくども  
 7 名はあれどもそのすがたいづれもわかちがたし  
 8 黏臍饅餠餠桂心などやうの物なり饅餠  
 9 索餅はめぢかき物なれば誰も見をよびたる物  
 10 にや三献のぎあり一こんには國栖哥笛をそ  
 11 うす是は吉野の國棲人の事なり應神天  
 (上) 皇十九年十月に吉野宮に行幸ありしとき國  
 1 栖人まいりて醴酒をたてまつりて哥をうたひ  
 2 けりこの國栖人は山の木のみをとりにてくひ又蛙  
 3 を煮て毛瀾となづけて美味ありとてくひける  
 4 とかや吉野の川上にゐて峯けはしう谷ふかき  
 5 所なれば路さがしく侍るゆへにつねに來朝する  
 6 ことかなはずとなん申ける其のちはつねに參  
 7 て年魚やうの物をたてまつりけるとかや今の世  
 8 に國栖奏とて哥をうたひ笛をふきならすは  
 9 としのはじめに吉野より參たるといふ心なり  
 10 二こんには御酒のちよくしのぎあり三こんに  
 11 (上) 立樂をのく二曲をそうすその、ち宣命の拜  
 1 などいふ事ありさのみはくだくしければしる  
 2 すにをよはす其うへいつもの節会なれば誰も  
 3 (一二ウ)

4 おぼつかなく候はし抑この節會は天子紫震殿にときよなりて群臣百官に酒をたまふて宴會あるぎなり持統天皇四年正月に公卿を内裏にめしてとよのあかりするとあり宴會とかきてとよのあかりとよめり大かたの節會の名にて侍るにや豊明節會にかざるべからず神武天皇の御宇にも群臣をつどへて酒をたまひし事は日本紀にみえたり是などをも

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 (上 一四オ)

事のおこりとは申へきか  
光仁天皇寶龜四年の春よりは  
五位已上に衾をたまはりけり  
今もさやうのこゝちにて  
事はて、  
禄をたまふ  
ことあり

1 内侍所 御供 同日  
ウシメイデン

2 是は毎月に供ぜらるゝなり寛平年中にはじめらるこのないし所と申は三種の神器のその一なりちはやふる神代の事にや天照太神あまのいは戸をさしてこもり給ける時石凝神のいうつし給ふ日神の御かたちの鏡なりこれを八咫のかぐみとなつくそのち地神第三代天津彦々火瓊々杵尊あしは

9 らの國の主となり給てあまくだり給しとき天照太神みづから三種の神寶をさづけ給ふとて此かゝみをば我を見るがごとくせよとのたまひし

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 (上 一五ウ)

なり代々のみかどつたへて寶物とし給しに人皇第十代崇神天皇の御ときこの御鏡をいかへられて神代よりつたはりし御かぐみをは伊勢國五十鈴川上にあがめ申さる是すなはちいまの伊勢皇太神宮なりさてかのしんざうの御かがみをは皇居に置申さる垂仁天皇の御宇にはやうやく神威をおそれさせ給て別座に安置申さる温明殿これなり村上天皇の御宇天徳のぜうまふのときは此御かぐみ灰の中に有てさらにやけそんずることなかりしよし御記にのせられたりある説に神鏡南殿の櫻のき

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 (上 一六オ)

にとびかゝりて有しを小野宮関白の袖にうつし申され侍りしといふ説も侍れとなを村上の御記をそ實説とは申べからん寿永の乱に二位の尼先帝をいだき奉りてわだづうみのもくづと成し時もこの御鏡はことゆへなく都へかへり給けるぞかしいまにいたるまで神宮とひとしくあがめ申されてあからさまにも主上は神宮内侍所の方をは御あとにはせられ侍らぬ事なりまた同殿に御座ありし時は主上は御髻をはなたれぬ事にて御かふりに穴





2 これ直衣にて殿上人は布衣なり幄屋をまう  
 3 け幔をひきめぐらし小庭となして小松をひ  
 4 しとうへられたり籠物折櫃破子やうの物を  
 5 奉り人々和哥を献すそのときの序者は  
 6 平兼盛とかや清原元輔曾根好忠などいふ  
 7 哥人ともに侍しさだめてかのときの哥など  
 8 は代々の集にいりつらんかさねて引勘へし

(上 二一ウ)  
 1 持統天皇三年正月上卯日大学寮よりた  
 2 てまつるよし日本紀にありまた仁壽二年正  
 3 月に諸衛祝杖を献して精魅をおふとみえ  
 4 たりこれをもて悪鬼をはらふ心地なり作  
 5 物所よりすはまをつくり物にしてそのうへに  
 6 巖の中に御生氣の方の獸をつくりて卯杖  
 7 にあはしむたとへは生氣ひんがしにあらは  
 8 兎みなみにあらは馬なるべし臺盤所にをか  
 9 る延喜式には正月の卯の日兵衛督以下ま  
 10 もの、ほん出  
 11 いらて御杖をそうするぎありいろくの木

(上 二二オ)  
 1 を五尺三寸づゝにきりて二束三束に結てた  
 2 てまつるを御杖といふよし見えたり  
 3 二宮大饗 二日  
 4 二宮とは東宮中宮を申なり王卿以下本  
 5 宮に参じて拜礼の事あり次に玄輝門の

6 東西の廊にして饗につく先中宮の饗に  
 7 つく次に東宮の饗につく三献のぎあり天  
 8 長七年正月に群臣皇后を拜し奉り衾  
 9 をたまはる又皇太子を賀すとありたえて久し  
 10 き事にこそ  
 11 朝覲行幸 同日

(上 二二ウ)  
 1 是は天子としのはじめに上皇并母後の宮に  
 2 行幸なることなり嵯峨天皇大同四年八月  
 3 に朝覲の儀ははじまる嘉祥二年正月廿日仁  
 4 明御門母后にてうきんのために冷泉院に行  
 5 幸なるかるときみかど南階を下て笏をた  
 6 しくして跪たまひしことも侍るにや周礼に  
 7 春を朝といひ秋を覲といふとみえたり是てう  
 8 きんの心なり漢高祖は五日に一度父の太公  
 9 に朝せられたりひとのみかだにもその例ある  
 10 事にこそまた春宮成人の御時は朝覲のぎ  
 11 あり元正御門養老二年正月に大極殿に出

(上 二二オ)  
 1 御なりて東宮参昇たまふ其のちはたび  
 2 のことなりまた天長十年三月に淳和御門紫宸  
 3 殿に出御なりて東宮王九才てうきんのきあ  
 4 り拜舞して昇殿のち御衣をたまふ東宮  
 5 これをとりて拜舞してまかで給ふ容儀ことに  
 6 成人のごとしなど國史にしるせり是は恒貞親

7 王の九さいの時のことなんかし文王世子たりし  
8 とき王季に朝すること日に三度など礼記  
9 にみえたり是などを東宮てうきんの例とも  
10 申へからん

(上 二二ウ、図絵)  
(上 二三オ)

臨時客 同日

1 是は攝政関白家春のはしめ大臣以下  
2 達部を招引してあそび侍ることなりきた  
3 まれる公務にあらねば臨時客と申にや大方  
4 大臣の母屋の大饗はとしをへておこなひ侍し  
5 ぞかし鷹飼などわたりてその興あることにて  
6 侍りき是は藤氏の長者朱器の饗をまうけ  
7 侍る也大臣家には様器の饗をそなふるなり  
8 臨時客にも尊者などありてよのつねの大饗  
9 のぎしきに同じはてつかたには御遊ありて  
10 催馬樂をうたふちか比は攝関家にもかやうの事  
11 (上 二三ウ)  
1 絶たるぞ念なく侍る  
2 視告朔 三日  
3 是は百官の行事上日を注して毎月天子の  
4 御らんぜらるゝ也告朔の文をみそなはずと  
5 申心也天子大極殿に出御なりて見たまふ  
6 天武天皇五年九月には雨によりて告朔なし  
7 と日本紀にあれば此時よりさきにはじまりぬ  
8 としりぬへし論語にいへるは毎月告二朔 庶一

9 といへりそれをも告朔といへり字は同じけれど  
10 心はかはれり言捨意別とはかやうのことにや  
11 この事は一日にあり又四日などにもある也

(上 二四オ)

1 視告朔とかきてたゞかうさくと二字によむ  
2 口傳にて侍るよし也こくさくとはよむへからず  
3 御國忌 四日

4 正月四日は村上天皇の母後の御國忌なり天  
5 曆九年の正月に御門宸筆をそめられ法華  
6 經をあそばして弘徽殿にて御八講のぎ侍り  
7 きその、ち法性寺にて毎年御八講おこなはる  
8 るにさしたる事なし大かた法華八講と  
9 いふことは勤操といふ沙門延曆十五年よりおこ  
10 なひはじめけるにや石湖の八講とこれをいふ也  
11 十講三十講も同じくこの沙門のはじめておこ

(上 二四ウ)

1 なひけるとこそ承れ  
2 叙位 同日 近代五日

3 其儀大臣以下左仗の座につきて先事をもよ  
4 をしおこなふ次に議所につきて勸盃のぎしきな  
5 どありちか比はこの事たえて侍るにこそ次に  
6 蔵人して諸卿をめす公卿射場殿にてはこ  
7 文をとりに次第に御前の座につく関白并  
8 執筆めしによりて圓座にす、みつく執筆  
9 十年の勞をそうし續紙をめし位を次第に  
10 叙す源藤橘の氏の爵の申文入内一加階

11 の勘文かんもんなどいふ事侍りさのみはくだ／＼しけれ

(上 二五才)

1 はしるすにおよはず推古天皇十一年十二月に  
2 はじめて冠位くわんみをおこなはる大徳小徳大仁小仁大礼  
3 小礼大信小信大義小義大智小智この十二階也  
4 いまは是にはかはりたることなれとも位のおこりを  
5 申さんには是なんかし天智天皇十四年正月に  
6 諸王諸臣に爵位をたまふとみえたり此叙位も  
7 とは六日にて侍しを天徳五年より五日にはしめ  
8 てこのぎありあかつきなどをよべば七日の節会  
9 の懈怠けだなりとてとりあげられけるにこそされば  
10 いまにいたるまで五日にさだまれり主上しゅじやうもしは  
11 執柄しつへいなどの衰日すいじちにあたれば六日におこなはる、  
(上 二五ウ)  
1 こともつねの事なり  
2 白馬節會 七日  
3 この節会せちえの事大かたは元日げんじちなどに同し元日  
4 は氷様腹赤贄御曆ひのたましはらかのあかぢりやくなどあるによりてをしなへて  
5 諸司奏しよしあそといふ也今日は兵部省ひやうぶのせうよりたてまつる  
6 御弓みゆきの奏そうばかりを内辨ないべんもそうもんするなり  
7 もし卯日うひにあたらば今日も諸司奏しよしあそといふへ  
8 し卯杖うづえ奏そうあるによりて也しからざるときは  
9 た、御弓みゆき奏候哉そうかうとおほす天竺てんぢくの貝多羅葉ばいたらようは  
10 その長七尺五寸ながしちやくごすんなり弓のたけも七尺五寸なる  
11 ゆへに是をたらじとは申にや白馬節會あをむまのせちえを  
(上 二六才)  
1 あるひは青馬あをむまの節せつとも申なり馬は陽やうの獸けもの

2 なり青あをは春はるの色いろなりこれによりて正月

3 七日にちあをむまを見ればねんぢうの邪氣じやくきを  
4 のぞくといふほんもん侍るなり仁明にんめい御門承みかどせう  
5 和元年わげん正月しげつ豊樂院ぶらくいんにおはしましてあを  
6 むまを見給ふ同六年どうろくにん正月には紫宸殿ししんでんに  
7 て御らんせらるされはこの馬うまの事こと礼記らいきに春  
8 を東郊とうかうにむかへて青馬せいば七疋しちつをもちゆと有  
9 七は少陽せうやうのかず正月は少陽せうやうの月つきなり又  
10 十節録じっせつろくに白馬はくばを馬うまの性しやうの本ほんとす天てんに白  
11 龍りゆうあり地ちに白馬はくばありまた天てんの用ようは龍也

(上 二六ウ)

1 地ちの用ようは馬うまなり人の用ようは龜かめなりと申本  
2 文もんも侍るにやいまの節會せちえに三七廿一疋ひきを  
3 ひかる、は是三さんは三才さいにかたどり七は七日  
4 にあつるよし寛平くわんぺいの御記おんきにのせられたり  
5 今日けふの毛けづけのそうにもみなあしげと  
6 ばかりあり是白馬はくばを本ほんとするゆへなり  
7 ぎしきなどは大かた元日げんじちに同し  
8 そのうへいつもの  
9 事ことなればしるすも  
10 めつらしからぬやうなれば  
11 かきのせす

(上巻、続く)  
(広島大学日本語史研究会)